

母親の語りのスタイルにおける地域差

—東京と沖縄の場合—

日本獣医畜産大学 柿沼美紀

文京女子大学 上村佳世子

How Mothers Tell Stories

- Comparison of Tokyo Mothers and Okinawa Mothers -

Nippon Veterinary and Animal Science University KAKINUMA, Miki

Bunkyo Women's University UEMURA, Kayoko

母親の語りの地域差の検討を行った。沖縄と東京の親の語りには、1) 発話数、2) 発話の種類、3) 語りのスタイルに違いが見られた。東京の親は沖縄の親に比べ発話数が多いだけでなく、言葉の種類も多い。沖縄の親は子どもにシンプルな形で状況を説明するのに対し、東京の親は登場人物の内的状態に言及する頻度が高かった。また状況の解釈も登場人物の「対立」と「過失」の両方から行う親が半数近くいた。このように、選択肢を多く与え、子どもに考えさせる東京の親のスタイルと、シンプルな形で情報を提示する沖縄の親のスタイルに地位差が示された。子どもは母親の語りや応答に触れることをとおして、周囲の世界を理解し、そこで適応していくための意味システムを獲得していくのである。

【キー・ワード】 語りのスタイル, 地域差, 意味システム, 東京, 沖縄

Story telling styles of Okinawa mothers and Tokyo mothers are compared. Tokyo mothers not only talk more, but also use various types of speech. While Okinawa mothers tend to present the picture with simple and easy forms, describing what one sees and giving a single interpretation of the situation. On the other hand, Tokyo mothers go further and talk about what one does not see, the inner state of the characters and also give several interpretations of the situation. Even within Japan, there are different styles of telling stories, possibly reflecting the differences of meaning systems of the local societies.

【Key Words】 Story telling styles, Sub-culture differences, Meaning systems, Japan

はじめに

母親の子どもに対する語りのスタイルは、その文化のプロトタイプを反映しているという考え方のもと、日米の母親による語りのスタイルの比較検討が行われている (Wakabayashi, Fernald, &

Kakinuma, 2001)。本研究では、国内における母親の語りのスタイルを比較し、それぞれの地域のプロトタイプについて検討する。Wakabayashi, Fernald, & Kakinuma (2001) 及び柿沼 (2001) の手法を用い、東京、沖縄地域の3歳から5歳の子どもと母親を対象に同様の課題を実施した。

最近の国内比較研究には、沖縄と関東の児童の原因帰属意識について検討したもの(上田, 1998; 嘉数他, 1995; 柿沼, 2001) や、東北と関東の児童、生徒の社会的意思決定や原因帰属に関するものがある(柿沼他, 2000; 宮下他, 2000)。これらの研究からも、初期の段階から運動や言語発達、また児童期の学習動機づけ、母親の語りのスタイル、社会的意思決定において地域差が見られることが明らかになっている。言語発達では関東圏の子どもの語彙理解の発達が東北、沖縄よりも早いことが報告されている(上田, 1998)。母親の語りのスタイルに関しては、東京の親が子どもとの相互作用を促す傾向が見られるのに対し、沖縄では親が子どもに話を聞かせる傾向が見られた。また東京の親はさまざまな働きかけをしながら、子どもとのやりとりを持続させるのに対し、沖縄の親は短い時間で、子どもに負担をかけない程度に働きかける傾向があった。話の内容では、東京の親の話は時間的移動、日常生活との関連づけなど、ふくらみが見られたのに対し、沖縄の親は絵にかかれていることの説明が中心であった。また、東京の子どもは積極的に母親の話に参加し、時には子どもが中心で話を展開していた。それに対し、沖縄の子どもはおとなしく母親の話を聞き、母親のペースにあわせる傾向が見られた(柿沼, 2001)。

Valsiner (1997) は、おとなが自分の周囲の世界を理解する、個人の意味システムをもつものに対して、子どもは親や自分より経験のある仲間などの他者との社会的相互作用をとおして、意味システムを獲得していくとしている。子どもはおとなとの共同行為をとおして、生活環境に関する意味を新たに構築し、その文化において適切な行動様式を獲得していくのである。それは決して、おとなのもつ行動様式や意味の単純なコピーではなく、子どもがそこでの活動に参加することをとおして達成する、積極的な文化獲得と適応の過程なのである。母子間で構成される語りは、まさに子どもが新たに自身の意味システムを構築し環境に適応していくためのサインとして機能し、子どもの社会化を間接的に方向づけていく。子どもは母親の語りに直接的に触れ、自分の発話に対する母親の反応をみることによって、自らの語りのスタイルを獲得していくものと考えられる。

母子相互作用のなかで、子どもの内的状態に言及できるようになるのは、2, 3歳頃からであることが言われているが、他者の知覚、感情、思考など内容によっても、母親の個人差や場面によっても出現のしかたが異なる(Brown & Dunn, 1991; 園田, 1999; 園田・無藤, 1996)。これらの研究によると、母親が相互作用のなかで子どもや他者の内的状態に言及することが、子どもの内的状態の理解やそうした言葉の使い方に影響している。また、絵本を読む場面では子ども中心に相互交渉が展開され、母親は子どもに合わせて事象への言及が多いことが明らかとなっている。日常生活のなかでの母子相互作用、すなわち母親の他者への言及の頻度と、場面に応じた内的状態への言及が重要な役割を果たしている。このような母子の語りを中心とするおとなとの関わりのなかで、子どもの他者理解や行動様式の獲得がなされていると考えられる。

このように母子相互作用は、それぞれの文化によって母親の語りのスタイルも働きかけの内容も、また子どもの側の応答や語りも異なった様相を呈している。他者の行為を理解し語るといふ、日常的

には頻繁に起こると考えられるような場面においても、母子が他者の行為のどのような側面に注目し意味づけしていくかは、それぞれの文化の持つ意味システムによって規定されるものと考えられる。そこで本研究では、東京と沖縄の母子の、絵を介した相互作用の観察のなかで、母親の語りのスタイルに焦点をあて、どのような説明や理由づけをしているのか、また、子どもはそれに対してどのような応答をしているかを明らかにすることを目的とする。このことから、それぞれの地域の子どもが他者の行為に関してどのような情報を使用するのか、他者についてどのような認識を形成していくのかを検討していく。

調査方法

被験者：東京、沖縄の3歳から5歳の子どもと母親。東京21組（平均年令3.9才）、沖縄15組（平均3.9才）である。

課題：Wakabayashi, Fernald, & Kakinuma (2001) 及び柿沼 (2001) と同じ手順で行った。4枚の絵は子どもの絵本を参考に作成されたもので、いろいろな解釈が可能なものである。ここでは、そのうちの1枚（図1）に関するやりとりを分析した。課題は自宅、友人宅、保育園などで行われた。母親に、絵を用いて子どもに話をするようにと指示し、その様子を映像と音声で記録した。

結 果

発話を起こしたものを分析。登場人物の内面に関する発話と「泣いている」理由に関する部分を対象とした。発話量について地域差があることはすでに指摘されているが（柿沼 2001）、絵の説明（子どもが泣いていること）、登場人物の内面および状況の背景説明に関しても東京の親の平均発話量が沖縄のものを上回っていた（図2）。また、発話内容にも差が見られた。東京の親の方が発話の種類が多かった。登場人物が泣いていることに対しては、沖縄の親が「泣いている」といった、絵に描かれていることを説明することが多かったのに対し、東京の親は「泣いている」に加え、絵には直接描かれていない「欲しい」「悲しい」など、登場人物の内面の状態についても言及している（表1）。

図1 泣いている子の絵



図2 平均発話回数(親)

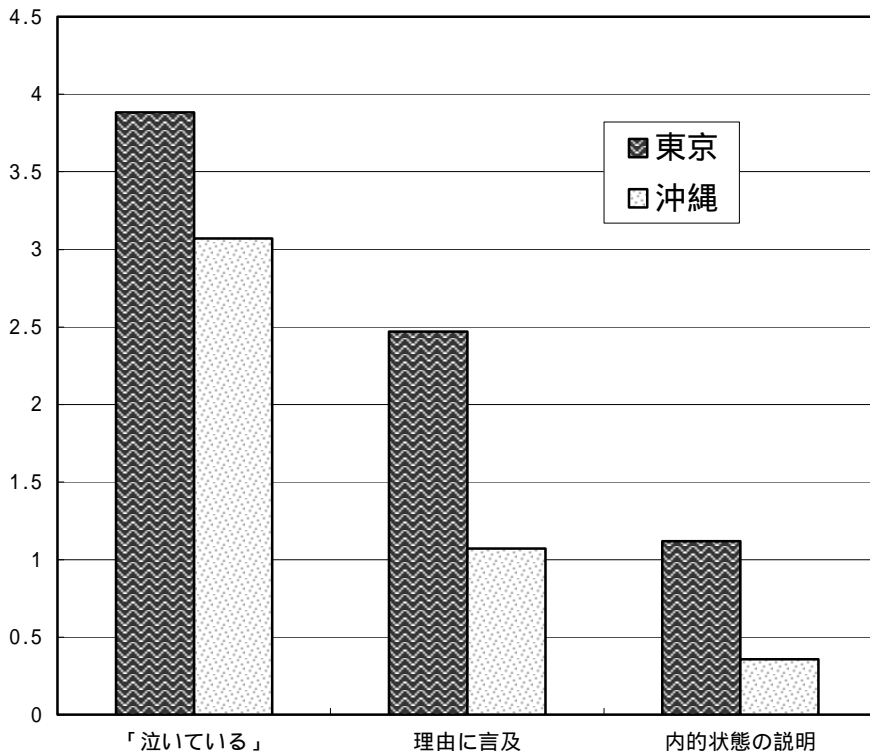


表1 子どもの内的状態の説明に用いたことば

	東京	沖縄
内的状態	怒る 痛い 欲しい 悲しい 心配 楽しい 嫌い 優しい 悪いと思う	怒る 痛い

登場人物の1人が泣いている理由の説明にも違いが見られる。沖縄の親は登場人物の間に「対立」があったと見る傾向があるのに対し、東京の親は、「対立」について言及すると同時に「その他の可能性」についても指摘する傾向がある(図3)(表2)。つまり、登場人物が泣いていることを説明するために、複数の異なった視点から解釈を試みるのである。一般的に子どもが絵を見て登場人物の間

に「対立」があったと解釈するのに対して、東京の親は「対立」の可能性を認めながらも、一方が「故意ではない」が結果として相手を泣かした可能性を指摘する傾向があった（表3）。

図3 泣いている理由の説明（平均発話回数）

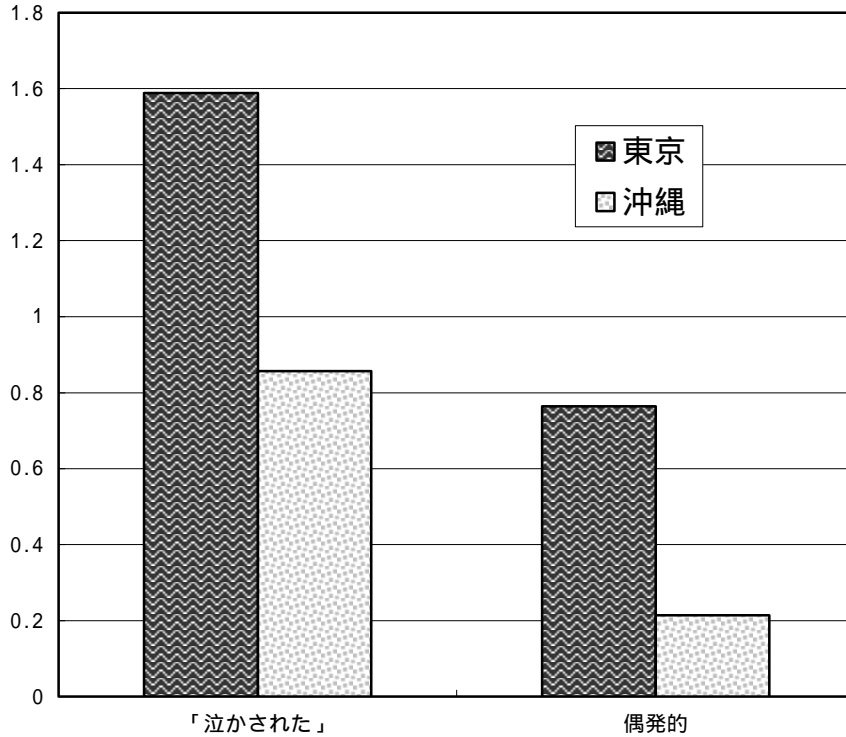


表2 泣いている理由

	東京	沖縄
泣かされた	けんか いじめた 折られた たたいた さした 投げた 取られた 怒った	けんか いじめた たたいた 投げた 怒った
その他	壊れた 刺さった 転んだ ぶつかった ひっぱりっこ 欲しい 母がいない	壊れた 転んだ

母親の語りのスタイルにおける地域差

表3 親子のやり取り(抜粋)

東京	母	あ、これ何してるんだろう？
	子	けんか。
	母	けんか？♪ねえ、これ泣いてるね。
	子	○○ちゃん。
	母	○○ちゃん？これ
	子	おもちゃ 取られた。
	母	これ、どうしたの、これ。
	子	どこ？
	母	ん、なんかさ、棒使っててこわれてるみたいじゃない？
	子	棒さしたから こわれた。
	母	ん、なんかさ、棒使っててこわれちゃってさ、それで泣いているんじゃない？♪ね、この子は何してるのかな？
	子	折ったの、棒。
	母	棒折ったの、この子かな。
	子	ん。
	母	ねえ、それともさあ、♪この子の棒のおもちゃを この子が折っちゃったから しかられてんのかな？♪「なんでこわしたんだよ」、「ごめんなさい」って言っているね。
	子	うん。
	母	ね。
東京	母	おや？
	子	泣いてる。
	母	これは どうしたんでしょうね？
	子	泣いてる。
	母	泣いてるね。
	子	この子がxxx
	母	この子が何をしたんだろうね？
	子	うん、たたいたの。
	母	たたいたのかな？これ、何だろう？
	子	木
	母	木かな？あ、木か。あ、棒でたたいたのかな？
	子	そうかも。
	母	そうかな。♪でも 分からないよ。♪この子が大事にしていた棒を折っちゃっただけなのかも。♪そうでなくて だろうな。♪この子が泣いてたんで この子が助けに来たのかも かもしれない。♪「そうしたの」って、「どうして泣いているの」って来たのかも。
	子	でも、こっち向いている。
	母	こっち向いている？♪だって この子が泣いてたらこの子がこっちから来て「どうして泣いているの」って聞いたところかもしれないよ。
	子	でもさ、お顔見てない。
	母	お顔みていないですか。そうですか。
沖縄	母	男の子が二人います。♪一人の子は泣いています。♪どうしたのかな？
	子	・・・
	母	たぶんけんかして、泣いてしまったのかな？
	子	・・・
	母	はい、おしまい。
沖縄	母	○○、これは何してる？
	子	泣いてる。
	母	この子泣いている。♪うん、うんしてるね。♪なんで うんしてるかね？
	子	XXX
	母	うん。
	子	けんかしたから。
	母	友だちとけんかしたのかね？♪どんなして けんかしたのかね。♪うん。どっちが悪いかね？
	子	ん。

考 察

東京と沖縄の語りのスタイルの違いがあることはすでに指摘されているが(柿沼, 2000), 今回の研究ではその違いがさらに明らかになった。沖縄では親が子どもに対して分かりやすい形で情報を提示する。一方東京では親が子どもに質問を投げかけ, 子どもの参加を促しながら話を進めていく。絵の状況の解釈に関しても複数の選択肢を示し, 絵には直接描かれていない登場人物の内面に言及している。

子どもが親から受けるメッセージを考えると, 沖縄の場合は, 単純ではあるが分かりやすい情報が提供されている。子どもはどちらかといえば, 情報の受け取り手としてやりとりに参加している。一方, 東京の子どもは, 絵を介して様々な可能性について考える機会が与えられる。親の質問に答えながら, 親子で解釈を行っている。東京の場合, 子どもが絵を持ち, 気が付いたことを話し, それに対して親がコメントするという進め方が見られるように(柿沼, 2001), 子どもによっては, 自分が中心になって事が運んでいると感じることもあるのではないだろうか。

同じ研究の日米(東京の親とサンフランシスコの親)比較の結果は以下のとおりであった: 1) 日本の親は子どもと相談をしながら話を進めていくのに対し, 米国の親は子どもの意見を求めることは少なかった。2) 日本の親は全般的なコメントはしても, はっきりとした結論は出さないが, 米国の親は事の顛末を述べ, 登場人物がどういう気持ちになるかも子どもに伝えている(Wakabayashi, Fernald, & Kakinuma, 2001)。

米国の親と沖縄の親のやりとりには当然ながら違いが見られるが, 親が中心に物事が進むという点では共通している。つまり, 親がはっきりと上の立場に立ち, 子どもに何かを教える姿勢が伺える。一方東京の親は子どもに相談しながら物事を進める形を取っている。実際には親のリーダーシップの元に事が進んでいるのだが, 子どもは必ずしもそう受け止めていない可能性がある。

東京の子どもが家庭内で自分の意見が通ると考える傾向については, 別の研究でも報告されている。地域差の検討の試みとして行われた「社会的意思決定の態度・理解の発達に関する研究」(柿沼・宮下・東)では, 東京と山形, そして東京と米国(ワシントン D.C.)の小・中学生の意識の比較を行った。この中で, 最も地域・文化差が見られた項目の一つが「家庭での決定権」であった。これは子どもが日常生活において, 「自分の意見が聞き入れられると思うか」というものである。最も決定権があると感じていたのは東京の子ども, 次に山形, 最後に米国となっていた($p < .01$)。小学6年生に関しては東京の子どもの得点が特に高かった。

子どもに選択肢を与え, 多くの情報を提供することは子どもの認知発達のうえで重要なことだと考えられる。しかし, 今回調査対象となった3才から5才の子どもたちにとってこのような情報提供が最も好ましいかは定かではない。子どもによっては, 相談しながら物事を考えるより, 親がはっきりと説明する方が理解しやすい場合もあるだろう。また, そうすることで, 親に従う, 親から学ぶという態度も身に付くのではないだろうか。東京の子どもたちの, 幼児期から自分が中心で物事を進めるという態度が, 小学校6年の段階の「家庭での決定権」を持つという意識につながっていると考えられる。

子どもは社会的相互作用に参加することを通して、その社会・文化に適合する行動様式や語りのスタイルを学習していく。それは、おとなが必ずしも直接的に教え込んで子どもに学習させようとする過程ではなく、むしろ活動や場面をおとなと子どもが共同で構成することから、そうした適応のためのスキルを子どもが獲得し、積極的に使用していく過程である。本研究では、母親の内的状態や行為の理由説明、発話数といった観点から地域差を検討し、東京と沖縄の母親の語りのスタイルの違いを見いだした。しかし、母子の語りは場面によってかなり異なることが明らかになっており(園田, 1999; 園田・無藤, 1996)、今後はさらに、異なる場面の絵を介した母子相互作用を比較検討することが必要である。さらに、母子それぞれの語り指標についても、発話に使用される文型や品詞分析だけでなく、会話交代や語りという共同行為への貢献、また、子どもの発話のみならず、視線やジェスチャーなどの非言語行動にも焦点をあてて、子どもの語りのスタイルの獲得を検討していきたい。そのような語りや行動様式が、それぞれの文化的文脈のなかで子どもたちが学習することを求められている、状況の解釈の仕方や、社会的場面における行動の選択肢の意味の違いを表すものと考えられる。

引用文献

- 東 洋.(1994). *日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて*. 東京大学出版会.
- 東 洋・柏木恵子・R・D・ヘス.(1977). *母親の養育態度と子どもの知的発達：日米比較研究*. 東京大学出版.
- Brown, J.R. & Dunn, J. (1991). 'You can cry, Mum': The social and developmental implications of talk about internal states. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 237-256.
- Cutting, A.L., & Dunn, J. (1999). Theory of mind, emotion understanding, language, and family background: Individual differences and interrelations. *Child Development*, **70**, 853-865.
- Fernald, A. & Morikawa, H. (1993). Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, **64**, 637-656.
- 嘉数朝子・井上 厚・島袋恒男・廣瀬 等・前原武子.(1995). 沖縄県の児童の学習動機づけに関する研究：CAMI との関連で. *琉球大学教育学部紀要*, **47**, 223-231.
- Kakinuma, M. (1993). A comparison of the child rearing attitudes of Japanese and American mothers. *Childhood*, **1**, 235-242.
- 柿沼美紀.(2001). 母親の語りに見られる地域差の検討. *母子研究*, **21**, 56-61.
- 柿沼美紀・宮下孝広・東 洋.(2000). 社会的意思決定に対する理解・態度の発達に関する国内比較研究. *発達研究*, **15**, 101-106.
- 原 ひろ子・我妻 洋.(1974). *しつけ*. 弘文堂.
- 宮下孝広・真島真里・東 洋.(2000). 小学生の学業成績を予測する認知的要因：他者との関係を含意する構成概念に注目して. *発達研究*, **15**, 107-116.
- 田島信元・上村佳世子.(1995). 相互主観性としての母子相互作用モデルの検討. *母子研究*, **16**, 1-9.
- 園田菜摘・無藤 隆.(1996). 母子相互作用における内的状態への言及：場面差と母親の個人差. *発達*

心理学研究, 7, 159-169.

園田菜摘. (1999). 3歳児の欲求, 感情, 信念理解: 個人差の特徴と母子相互作用との関連. *発達心理学研究*, 10, 177-188.

上田礼子. (1998). *発達のダイナミクスと地域性: 岩手/東京/沖縄 '72-'97*. ミネルヴァ書房.

Valsiner, J. (1997). *Culture and the development of children's action (2nd ed.)*. New York: Wiley.

Wakabayashi, T. & Fernald, A. (1999). Getting the point across: content and dynamics in Japanese and American mothers' storytelling to preschool children. *Boston University Conference on Language Development Proceedings*.

Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (2001). What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.

<謝 辞>

本研究の調査にご協力をいただいた保育所の職員の方々はじめ, 保護者, 園児の皆さんに御礼申し上げます。また, 格別のご配慮をいただいた琉球大学の島袋恒男・嘉数朝子両先生に, 心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は文部省科学研究費補助金交付研究 基盤研究(B)「社会的判断の国内下位文化による変動の研究: 文化間変動因の交差妥当化の試み」(課題番号: 11410036; 研究者代表 東洋)の一部として実施された。